

---

アラビア語を母語とする日本語学習者における日本語の自  
動詞・他動詞・受身の選択について  
—自然力による被害の場合—  
(2)

**An Analysis of Arabic Language Speakers' Selection Among  
Pairs of Intransitive, Transitive, and Passive Verbs in  
Japanese Language: In case of damage caused by natural  
forces (2)**

(\*) Mr. Mohannad Alsarra

---

**Abstract:**

This paper builds upon the previous study titled *An Analysis of Arabic Language Speakers' Selection Among Pairs of Intransitive, Transitive, and Passive Verbs in Japanese Language: In cases where the subject is changed by the unintentional action of an inanimate object (1)*. The initial paper provided a review of existing research, identified the Japanese verbs examined in the study, and established a classification framework for cases that are believed to influence the verb choices of both native Japanese speakers and learners. This paper specifically focuses on cases in which damage is caused by natural forces, as illustrated in the following example.

(1) Ki ga Karete, taoreta no de, chikaku ni aru ie (a. ga kowareta. b. wo kowashita. c. ga kowasareta.)

In the case of Japanese speakers, it is natural to express this sentence using the intransitive verb as in (a), whereas Arabic speakers are more likely

---

(\*) Japanese Language Program, European and Oriental Languages Department,  
College of Language Sciences, King Saud University.

برنامج اللغة اليابانية، قسم اللغات الأوروبية والشرقية، كلية اللغات وعلومها، جامعة الملك سعود.

to use the transitive verb as in (b).

The purpose of this paper is to investigate the differences in the usage of these verbs and how the mother tongue of Arabic speaking Japanese language learners affects the way they distinguish these verbs, with a particular focus on cases of damage caused by natural forces. This research is part of a broader study comprising two distinct papers, each addressing the research problem through separate case analyses. These papers examine prior research from different theoretical perspectives and propose unique recommendations and findings for each case. Despite their distinct approaches, both studies are interconnected, as they originate from the same overarching research project, conducted simultaneously and involving the same participants.

**Keywords:** Transitive Verbs, Intransitive Verbs, Passive Voice, Arabic Language Speakers, Quantitative Research

### دراسة عن اختيارات متعلمي اللغة اليابانية الناطقين بالعربية لأفعال اللازم، المتعدي والمبني المجهول في اللغة اليابانية – مع التركيز بشكل خاص على حالات الضرر الناتج عن قوى الطبيعة – (٢)

#### مستخلص الدراسة:

هذه الورقة تُعدُّ استكمالاً للدراسة السابقة التي تحمل العنوان: دراسة عن اختيارات متعلمي اللغة اليابانية الناطقين بالعربية لأفعال اللازم، المتعدي، والمبني للمجهول في اللغة اليابانية – مع التركيز بشكل خاص على الحالات التي يتغير فيها الهدف نتيجة فعل غير مقصود صادر عن كائن حي – (١).

في الورقة الأولى من هذا البحث، قمتُ بتوضيح الأبحاث السابقة، وتحديد الأفعال اليابانية المستهدفة في هذه الدراسة، بالإضافة إلى تصنيف الحالات التي يُعتقد أنها تؤثر على اختيار كلٍ من المتحدثين الأصليين لليابانية ومتعلميها.

تركز هذه الورقة تحديداً على حالات الضرر الناتج عن قوى الطبيعة، كما في المثال أدناه:

(1) Ki ga Karete, taoreta no de, chikaku ni aru ie (a. ga kowareta. b. wo kowashita. c. ga kowasareta.)

في حالة متحدثي اللغة اليابانية، من الطبيعي أن يعبروا عن الجملة أعلاه باستخدام الفعل اللازم كما في الاختيار (a)، بينما في حالة متحدثي اللغة العربية، فإنهم أقرب للتعبير عنها بالفعل المتعدي كما في الاختيار (b).

الهدف من هذه الورقة هو تقصي الاختلافات في استخدام هذه الأفعال وكيفية تأثير اللغة الأم على متعلمي اللغة اليابانية الناطقين بالعربية في التفريق بين هذه الأفعال، مع التركيز بشكل خاص على حالات الضرر الناتج عن قوى الطبيعة. هذا البحث هو جزء من بحث أكبر وهو مكون من ورقتين منفصلتين يناقشون مشكلة البحث في حالتين مختلفتين من خلال استعراض الأبحاث السابقة من زاويتين مختلفتين ومن خلال تقديم توصيات ونتائج مختلفة لكل ورقة منهم. ولكنهم يشتركون في أنهم جميعاً من بحث واحد كبير تم عمله في نفس الفترة وتجاه نفس المشاركين في البحث.

**الكلمات المفتاحية:** الفعل المتعدي، الفعل اللازم، المبني للمجهول، متحدثي اللغة العربية، بحث كمي

アッサラー・ムハンナド

## 1. はじめに

本稿は、筆者が研究した Alsarra(2019)「アラビア語を母語とする日本語学習者における日本語の自動詞・他動詞・受身の選択について」の一部である。場合分けした論文を二編同時期に投稿する。第一編は「アラビア語を母語とする日本語学習者における日本語の自動詞・他動詞・受身の選択について—無情物の非意図的な作用による対象の変化の場合—(1)」であるが、本稿は第一編の続きであり、「アラビア語を母語とする日本語学習者における日本語の自動詞・他動詞・受身の選択について—自然力による被害の場合—(2)」というテーマの下で、第二編として投稿する。従って、第一編と第二編の本稿は、題名、キーワード、先行研究、方法論、対象者、アプローチ、データの示し方、参考文献という点で共通しているうえに、研究期間も同様である。ただし、両論文の異なる点としては、副題とその分析、先行研究の観点、そして今後の課題である。第一編では日本語母語話者とアラビア語を母語とするエジプト人日本語

学習者による日本語の自動詞と他動詞と受身の無情物の非意図的な作用による対象の変化の場合の選択傾向を見たが、本稿では、同対象者による自然力による被害の場合の選択傾向を見ることにする。本稿では、第一編の先行研究の概要を示し、先行研究の違う観点として、アラビア語の自動詞・他動詞・受身に関する日本語での先行研究を紹介し、そして本稿の副題の「自然力による被害の場合」というカテゴリーに焦点を当てることにする。「自然力による被害の場合」は以下の(1)のような例文である。

- (1) 木が枯れて、倒れたので、近くにある家(a. が壊れた。 b. を壊した。 c. が壊された。)

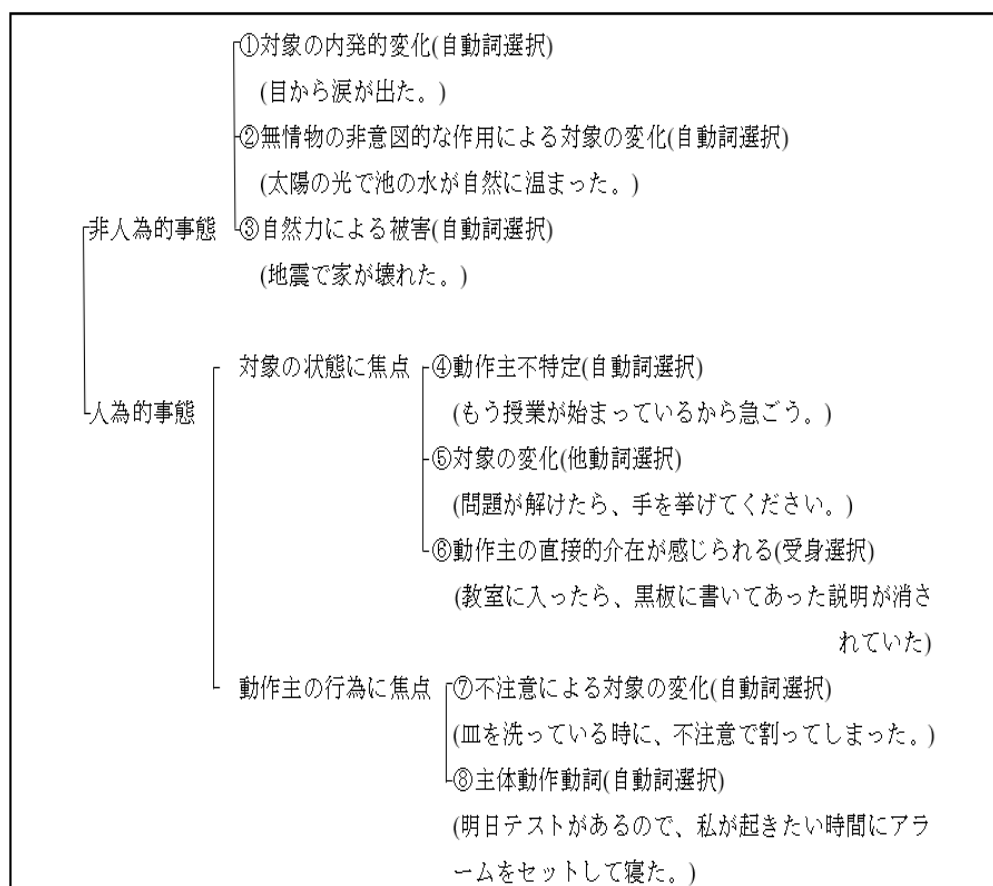
上記の(1)は日本語で「木が枯れて、倒れたので、近くにある家が壊れた。」と表現されるのに対し、アラビア語では「*thabalat alshajarah wa sakatat fa hatamat albayt almujawir*. (木が枯れて、倒れたので、(枯れた木が)近くにある家を壊した。)」と表現したほうが自然である。このような両言語の相違点は、学習者の選択傾向にどれだけ影響するかを図ることを本稿の目的である。

## 2. 先行研究

本研究の第一編では、本研究で採用した寺村(1982)の日本語の自動詞と他動詞と受身の定義を示し、自動詞と他動詞と受身の使い分けの分類の仮説に辿り着くまでのプロセスを示すために、守屋(1994)、曾(2012)、杉村(2013b)、アブデルラフマーン(2017)を取り上げた。前者と後者をまとめると、まず本研究で対象にした動詞の条件は以下の通りになる。

- ① 共通の語源を持ち、形態的対立をなす有対自動詞と有対他動詞である。  
(例：壊れる／壊す、割れる／割る、決まる／決める)
- ② ①の有対他動詞の直接受身を表す構文である。(例：壊される、割られる、決められる)

また、自動詞と他動詞と受身の使い分けの分類を参考に、予備調査を実施したうえ、本研究で採用した使い分けの分類の仮説は以下の図(1)の通りである。



図(1): 本研究で採用した事態の分類の仮説

本研究で取り上げた日本語の自動詞と他動詞と受身に関する先行研究と、動詞の分類に関する先行研究の詳しくは、本研究の第一編の「アラビア語を母語とする日本語学習者における日本語の自動詞・他動詞・受身の選択について—無情物の非意図的な作用による対象の変化の場合—(1)」を参照することを勧める。

第一編の先行研究を上記の通りにまとめて、本稿の先行研究では、アラビア語の自動詞と他動詞と受身に関する先行研究を取り上げる。

## 2.1 アラビア語の自動詞と他動詞と受身に関する先行研究

本節はアラビア語の自動詞・他動詞・受身に関する先行研究を概観する。

### 2.1.1 新妻(2009)

新妻(2009)は、アラビア語の大きな特徴は語根と呼ばれる 3 つの文字が動詞を形成し、大部分の単語はこの動詞の語形変化によって誕生しているという点であると述べている。ある動詞の派生の形を説明する場合に、FA'ALA(فَعَلَ)<sup>1</sup>という原形となっている過去形<sup>2</sup>の他動詞が用いられる。FA'ALA(فَعَلَ)の本来の意味は、「行為を行う」ことである。

自動詞の意味を表す主な派生形は、ENFA'ALA(انْفَعَلَ)<sup>2</sup>である。以下の(2)と(3)は同じ動詞の自動詞の場合と他動詞の場合を表す。(38)の(kasar(割る))は過去形の他動詞として基本形で、(kasara)から(enkasara)の自動詞が派生されている。

(2) huwa kasar a sahn

彼 割った 皿

(彼が皿を割った。)

(3) enkasara a sahn

割れた 皿

(皿が割れた。)

((2)と(3)は作例)

アラビア語の自動詞は、基本的に単に事実を述べることだけに使用するが、木村(2006)は、行為者が不明であることが前提になっているとき、あるいは意図的に行為者を示したくないときに用いられると述べている。また一人称の場合の自動詞は、話し手が責任を持ちたくない場合、即ち不注意でしてしまったことの場合にも用いられる。新妻(2009)はアラビア語の受動文と自動詞文についてこのように記述しているが、次に取り上げるハッサン(2011)はアラビア語の自動詞文と受動文の形成を説明し、受動文との相違点を明らかにした。

### 2.1.2 ハッサン(2011)

アラビア語の自動詞について、ハッサン(2011)がある。ハッサン(2011)によると、en-接辞には、他動詞を自動詞に変える働きがある。以下の(4a)のように、この接頭辞を動詞に付加することによって自動詞が作られる。(4b)は、それに対応する受動文である。

1 他動詞の語形はアラビア語の文法書で派生形第 1 形と呼ばれている。

2 自動詞の語形はアラビア語の文法書で派生形第 7 形と呼ばれている。

(4a) en-fatah-a al-bāb-u. (自動詞構文)

開いた ドア

(ドアが開いた。)(ハッサン 2011:p.76(例文 10.a))

(4b) futih-a al-bāb-u(受動構文)。

開けられた ドア

(ドアが開けられた。)(ハッサン 2011:p.76(例文 10.b))

(4a)と(4b)の相違点に関して、ハッサン(2011)は、(4a)では、「開ける」に当たる他動詞 *fataha* の語頭に *en-*が付与され、自動詞形が派生されているのに対して、(4b)では、他動詞 *fataha* が母音変化によって動詞の受動態が作られている。また、*en-*接頭辞によって他動詞から派生した自動詞は「ひとりでに、ある状態になる」という意味を表す。ハッサン(2011)は以下の表(1)で様々な動詞を取り上げ、他動詞、自動詞、受動態を示している。

| 他動詞                     | 自動詞                     | 受動態                     |
|-------------------------|-------------------------|-------------------------|
| <i>fataha</i> 「開ける」     | <i>en-fataha</i> 「開く」   | <i>futiha</i> 「開けられる」   |
| <i>ghalaqa</i> 「閉める」    | <i>en-ghalaqa</i> 「閉まる」 | <i>ghuliqa</i> 「閉められる」  |
| <i>seaba</i> 「流す」       | <i>en-seaba</i> 「流れる」   | <i>suyyiba</i> 「流される」   |
| <i>qalaba</i> 「倒す」      | <i>en-qalaba</i> 「倒れる」  | <i>quliba</i> 「倒される」    |
| <i>kasara</i> 「壊す」      | <i>en-kasara</i> 「壊れる」  | <i>kusira</i> 「壊される」    |
| <i>basata</i> 「広げる」     | <i>en-basata</i> 「広がる」  | <i>busita</i> 「広げられる」   |
| <i>nathara</i> 「散らかす」   | —                       | <i>nuthira</i> 「散らかされる」 |
| <i>rassa</i> 「並べる」      | —                       | <i>rusa</i> 「並べられる」     |
| <i>allaqa</i> 「(物を)掛ける」 | —                       | <i>ulliqa</i> 「掛けられる」   |
| <i>rattaba</i> 「片付ける」   | —                       | <i>Ruttiba</i> 「片付けられる」 |

表(1)(ハッサン 2011: p.77(表 11))

ハッサン(2011)によると、表(1)に挙げられている自動詞は意図性を持たない主語を取る。例えば「物が倒れる」の場合、物が意図的に倒れるのではない。またハッサン(2011)は自他のペアが存在する動詞と存在しない動詞の違いについて次のように説明している。外的な使役主による状態変化事象、もしくは主題3自体の自発的・内在的な力である状態に変化する事象を語彙化した動詞に

3 ハッサン(2011)はこの「主題」とは、他動詞構文における目的語で対応受動文における主語、及び、自発自動詞構文における主語に当たると定義している。

は、自他のペアが存在し、他動詞から自動詞が派生される。一方、「散らかる」「並べる」「片付ける」といった自動詞の表す事象は、主題の内在的な力だけで自然に成立できないため、これらの自動詞は存在せず、受動表現によってのみ表現される。このようにハッサン(2011)は自動詞構文を重視しながら受動文も視野に入れて比較した。次にアラビア語と日本語における受身形の対照研究を行った Elsherbeny(1999)を挙げる。

### 2.1.3 Elsherbeny(1999)

アラビア語の受身を取り上げた研究に、Elsherbeny(1999)がある。Elsherbeny(1999)によると、アラビア語の動詞は形態的に完了形と未完了形に分けられる。動詞の殆どは、3 字からできている。完了形 3 字動詞は、受身形にする場合、第 1 字の母音 a を u に、第 2 字の母音 a を i にする。

例：kataba (書いた) → kutiba (書かれた)(Elsherbeny1991:p.104)

未完了形 3 字動詞は受身形にする場合、第 1 字の母音 a を u に、第 2 字の母音 u を a にする。

例：yaktubu (書く) → yuktabu (書かれる)(Elsherbeny1991:p.104)

Elsherbeny(1999)は、受身が使用される 4 つの場合を以下のようにまとめた。

- A) 動作発者がわからない場合
- B) 話し手と書き手（または書き手と読み手）がお互いに動作発者を知っている場合
- C) 話し手(書き手)が動作発者を明確にすれば、話し手が困る場合
- D) 話し手(書き手)が動作発者を明確にすれば、動作発者が困る場合

さらに、Elsherbeny(1991)は、アラビア語の受身形が表す意味を次のように、説明している。

①客観的一次的受身：アラビア語の受身形は根本的に、客観的一次的受身を表す。

#### (5) surīqat ḥāfīzaty.

盗まれた 私の財布

(財布が盗まれた。)(Elsherbeny1991:p.104(例文①))



②説明文：説明の仕方の一つとして受身形がよく使われる。

(6) yūda'u allahimu fy alināi. thumma yuqallabu jaidan.

入れられる 肉 に 鍋 それから 混ぜる よく

(肉は鍋に入れる。それからよく混ぜる。) (Elsherbeny1991:p.104(例文②))

③自発：アラビア語から考えれば、アラビア語に＜自発＞がない。しかし、日本語から考えれば、アラビア語の受身形は＜自発＞と言える。

(7) yustakhrāju alhadidu min aljibāli.

採られる 鉄 から 山

(鉄は山から採れる。) (Elsherbeny1991:p.104(例文③.b))

④可能：アラビア語に＜可能＞を表す活用形がない。しかし、日本語から考えれば、＜可能＞を表す限られた場合がある。

(8) yumkinu aklu altha'ābīni.

可能される 食べる 蛇

(蛇が食べられる。) (Elsherbeny1991:p.105(例文④.b))

⑤許可：アラビア語に＜許可＞を表す活用形がない。しかし、日本語から考えれば、＜許可＞を表す限られた場合がある。

(9) hal yumkinu aljulūsu hunā.

質問詞 可能される 座ること ここ

(ここに座ってもいいですか) (Elsherbeny1991:p.105(例文⑥.a))

また、Elsherbeny(1991)は、アラビア語と日本語における受身形の主な相違点の一つとして、アラビア語では、受身形に変形される動詞が殆どであるのに対し、日本語では、受身形に変形されない動詞が相当存在していることを指摘している。例えば、＜ある、できる、劣る＞のような＜状態性動詞＞である。日本語の＜ある＞の意味をもつアラビア語の＜yūjadu＞は受身形である。＜yūjadu＞は直訳すれば、＜見つけられている＞という意味になる。

(10) yūjadu hunā kitābun.

見つけられる ここ 本

(ここに本がある。) (Elsherbeny1991:p.105(例文⑦))

上述のように Elsherbeny(1991)は受身が表す意味に焦点を置いたが、次に取り上げる木村(2006)はアラビア語の受身の特徴を解明するために、様々な資料

を用いてデータを分析した。

#### 2.1.4 木村(2006)

アラビア語の受身を取りあげた研究に、木村(2006)もある。木村は、Wright(1896-1898)が挙げる、アラビア語において受身表現が使用される場合を以下の様に簡潔にまとめた。

- ① 神、もしくは何らかの高位の存在が、行為の動作主である場合
- ② 動作主が全く知られていない、もしくは少なくとも確かには知られていない場合
- ③ 話し手、あるいは書き手が動作主の名前を挙げたくない場合
- ④ 聞き手、あるいは読者の関心が動作主よりも、その行為によって影響を受ける被動作主により多く向けられている場合

上記のアラビア語の使用状況に関しては、木村(2006:p.45)は、「おおまかに言えば、どれも動作主を述べるか述べないかが、受身表現を使用するか否かを決定する要因となっていると解釈できる」と述べている。

また、木村(2006)はアラビア語の受身構文が持つ特徴を明らかにするために、様々なアラビア語の資料(小説、新聞、雑誌など)を利用し、データを集めた。

顕著な結果は以下のようにまとめられている。

- ① 観察された受身形の動詞では、自動詞より他動詞のほうが受身形になりやすい。
- ② 受身形になりやすい動詞は能動態で使用すれば動作主である主語よりも、被動作主である目的語に焦点が当てられる場合が多い動詞が大半である。
- ③ 自分の意志とは無関係な行為を表現する際に、比較的受身構文になりやすい

さらに木村(2006)は動詞の受身形から使用されやすいと思われるものを、意味の観点から以下のように分類した。

- ① 被動作主に否定的な印象を与える動詞
- ② 移動・伝達に関する動詞
- ③ 呼称・評価に関する動詞
- ④ 神が動作主である動詞
- ⑤ 生死に関する動詞
- ⑥ 感情・精神状態に関する動詞

## 2.2 まとめ

本節ではアラビア語の自動詞・他動詞・受身に焦点を当てた。最初に取り上げた新妻(2009)はアラビア語の動詞の形成を説明し、特に自動詞と他動詞について記述した。次に取り上げたハッサン(2011)は自動詞文を取り上げ、受動文との相違点について説明した。また Elsherbeny(1999)はアラビア語と日本語における受動形の対照をし、アラビア語の受身が表す意味を挙げた。最後に木村(2006)は Wright(1896-1898)のアラビア語の受身が使用される場合を簡潔にまとめ、アラビア語の受身文の特徴を明らかにするため、様々な資料からデータを収集し、分析した。木村(2006)の分析はアラビア語母語話者における受身の選択意識を解明するために手がかりになると言える。調査結果では、自動詞より他動詞のほうが受身になりやすいと書いてあるが、その理由は、そもそも自動詞も受身も原形である過去形の他動詞から派生されるからであると考えられる。つまり、受身になりにくい自動詞は原形である過去形の他動詞に戻すと、受身になりやすくなると考えられる。また、調査結果の③は、受身に関する日本語母語話者の選択意識と明らかに異なっている。後でみるように、例えば、動作主の不注意による対象の変化を表す場合は、日本人の殆どは他動詞を選択したのに対し、アラビア語では、自動詞か受身になることが多い。

## 3. 調査

前述の通り、本稿の調査と本研究の第一編の「アラビア語を母語とする日本語学習者における日本語の自動詞・他動詞・受身の選択について—非意図的な作用による対象の変化の場合—(2)」の調査は修士課程で実施した大きな規模の調査の一部であり、両論文は修論の調査の一部だけに焦点を当てている。予備調査とその分析については第一編を参照のこと。本稿では第一編の調査の目的と本調査の概要をそのまま再記述する。

### 3.1 調査の目的

日本語にもアラビア語にも、自動詞・他動詞・受身があることは共通点であるが、両言語の使い分けは異なっている。例えば、日本語の場合は「直孝は五歳のとき父母に死なれた。」のような間接受身で表現するが、アラビア語の場合は、自動詞文で言う。また、日本語では他動詞で言うが、アラビア語では自動詞で言う。例えば、日本語で「皿を洗っている時に、不注意で割ってしまった」と言うことが普通であるが、アラビア語では、「皿を洗っている時に、不注意で割れてしまった」と言うことが一般的である。このような両言語の使い分けの相違点は、アラビア語を母語とする日本語学習者にどのように影響を与えるか、アラビア語を母語とする日本語学習者はどのような文脈で自動詞、他動詞、受身を使う傾向があるかを検証したい。

#### 4. 本調査

本研究で実施した調査の問題は以下の通りである。

① 対象の内発的变化の条件 4 問

1. 「目から涙(a.が出た。 b.を出した。 c.が出された。)」
2. 「たくさんの星(a.が空に現れた。 b.を空に現した。 c.が空に現された。)」
3. 「(a.落ちた b.落とした c.落とされた)リンゴから、ニュートンが万有引力を発見した。」
4. 「木が枯れて、(a.倒れた b.倒した c.倒された)ので、近くにある家が壊れた。」

② 無情物の非意図的な作用による対象の変化の条件 6 問

5. 「鳥が木の枝にぶつかって、(a.落ちた。 b.落とした。 c.落とされた。)」
6. 「ポケットの中のチョコレート(a.が体温で溶けた。 b.を体温で溶かした。 c.が体温で溶かされた。)」
7. 「風でドア(a.がボタンと開いた。 b.をボタンと開けた。 c.がボタンと開けられた。)」
8. 「台風でリンゴの実(a.が全部落ちた。 b.を全部落とした。 c.が全部落とされた。)」
9. 「風が強くてろうそくの火(a.が消えた。 b.を消した。 c.が消された。)」
10. 「太陽の光で池の水(a.が自然に温まった。 b.を自然に温めた。 c.が自然に温められた。)」

③ 自然力による被害の条件 3 問

11. 「地震で家(a.が壊れた。 b.を壊した。 c.が壊された。)」
12. 「火災で家(a.が焼けた。 b.を焼いた。 c.が焼かれた。)」
13. 「木が枯れて、倒れたので、近くにある家(a.が壊れた。 b.を壊した。 c.が壊された。)」

④ 対象の状態描写を表す条件(動作主不特定)2 問

14. 「もう授業(a.が始まっている b.を始めている c.が始められている)から急ごう。」
15. 「この町には鉄道(a.が通っている。 b.を通して通っている。 c.が通されている。)」

## ⑤ 行為の結果による対象の変化の条件 2 問

16. 「問題(a.が解けたら b.を解いたら c.が解かれたら)、手を挙げてください。」
17. 「さあ、ケーキ(a.が切れた b.を切った c.が切られた)から、食べましょう。」

## ⑥ 動作主の直接的介在が感じられる条件 3 問

18. 「教室に入ったら、黒板に書いてあった説明(a.が消えていた。b.を消していた。c.が消されていた)」
19. 「今朝事務室に入ったら、昨夜まで壊れていたエアコン(a.が直っていた。b.を直していた。c.が直されていた。)」
20. 「冷蔵庫を開けたら、よく(a.冷えた。b.冷やした。c.冷やされた)ビールを見つけた。」

## ⑦ 動作主の不注意による対象の変化の条件 4 問

21. 「皿を洗っている時に、不注意で(a.割れて b.割って c.割られて)しまった。」
22. 「友達にもらったキャンディーを食べたら、お腹(a.が壊れて b.を壊して c.が壊されて)しまった。」
23. 「転んで骨(a.が折れて b.を折って c.が折られて)しまった。」
24. 「試験に(a.落ちて b.落として c.落とされて)留年した。」

## ⑧ 主体動作動詞の条件 2 問

25. 「あしたテストがあるので、私(a.が起きたい b.を起こしたい c.が起こされたい)時間にアラームをセットして寝た。」
26. 「(a.消えたい b.消したい c.消されたい)ほど、辛かったら、いつでも相談しに来てください。」

対象の内発的变化の条件①は、予備調査のアンケートで1問であったため、学習者の一般的な選択方向を見られなかった。そのため本調査で増やし、4問にした。この条件の学習者の選択傾向をさらに見ることとした。無情物の非意図的な作用による対象の変化を表す条件②は、アラビア語で自動詞と受身の両方の表現で表すことができるので、特にこの条件に焦点を置く必要があると考えられる。そのため、6問にした。条件③の自然力による被害は本調査で初めて取り上げる。自然力による被害は杉村(2015b)が考えた条件であり、ここでの条件②に被害の意味が伴ったものである。条件③は自動詞と受身の両方の表現で表現しうる条件であるが、どちらかというと自動詞になりやすいと考えられる。そのため、3問にした。同じ非人為的事態に属しているにもかかわらず条件②と条件③との間に問題数の差があるのはアラビア語母語話者にとってこの二つの条件の間に相違点があるか否かをみることにした。予備調査では、条

件②は自動詞と受身の選択の混乱が現れると予測した条件であるが、予備調査の結果は、概ね他動詞より自動詞のほうがやや高かった。本調査では最終的にどちらの選択方向になるかを見ることとしたため、増やす必要があると判断した。一方、予備調査で取り上げなかった条件③は条件②より前述のように自動詞になりがちと想定するが、同じ非人為的事態に属している条件②とどう異なっているか、実際に自動詞になるか否かを明らかにすることにした。そのため条件②より少なくし、比較条件として取り上げた。対象の状態描写を表す(動作主不特定)条件④と主体動作動詞の条件⑧は、予備調査の結果から本調査でも自動詞の選択率が高くなると見られる条件であるが、本調査で予備調査の結果をさらに検証する必要があると考えられるので、予備調査の問題数のままにする。行為の結果による対象の変化を表す条件⑤は、予備調査の(24)と(25)問から他動詞の選択率が仮説通りやや高く、これはアラビア語と一致しているため、問題数を増やすことはないが、学習者のレベル別に予備調査と同様の結果になるか否かをさらに検証することにした。一方、対象の状態描写・動作主特定の条件(予備調査④)は学習者の選択方向をつかみにくかったため、動作主の直接的介在が感じられる条件⑥に変更した。動作主の直接的介在が感じられる条件⑥は、文に現れていない誰かによって対象がある状態になったという意味である。この条件の構文的な特徴は、発見という意味を表す条件文であることである。これはアラビア語で受身の表現で表現することが多いので、その影響は日本語にも現れるか否かを検証するためである。最後に、不注意による対象の変化の条件⑦は、アラビア語と日本語との間に相違点が出ると予測する条件の一つであるが、予備調査では想定と反対の結果になったので、この条件も増やすこととした。

また本調査の方法としては、回答者に a:自動詞、b:他動詞、c:受身という情報を示しており、動詞と助詞が一つの選択肢になっている。さらに、3 枚目に、アラビア語での単語の意味を加えている。

#### 4.1 本調査の概要

本調査はカイロ大学で日本語を専攻する二年生が 22 名、三年生が 10 名、四年生が 12 名、アイン・シャムス大学で日本語を専攻する二年生が 18 名、三年生が 17 年生、四年生が 20 名、カイロ日本文化センターで日本語を学ぶ N2 が 3 名、N3 が 3 名、N4 が 1 名である。合計が 106 名の学生にアンケートを実施した。各大学教師に確認したところ、それぞれの大学の学年は日本語能力試験で、二年生が N4 に、三年生が N3 に、四年生が N2 に当たるが、カイロ日本文化センターの学習者は日本語能力試験に合格した者に限定した。日本語能力試験の級別で分けると、N2 が 35 名、N3 が 30 名、N4 が 41 名である。調査の実施期間は、2018 年 4 月 1 日から 2018 年 4 月 13 日までであった。より精

緻なデータを得るために、学習者にわからない漢字の読み方やことばの意味があれば聞くように求めた。更に、辞書の使用や同級生との相談を許可した。同時に学習者個々が正しいと思う選択肢を選ぶことを強調した。制限時間を設けなかった。

また学習者との比較のために、日本語母語話者 59 名にも同様のアンケートを行った。

## 4.2 本調査の結果と分析

本研究では、データを分析するにあたって、特に次の視点に重点を置く。まず、学習者の母語であるアラビア語の影響を解明することである。次に、学習者の選択率が日本語母語話者の選択率に近いかに近くないかを明らかにすることである。それにより、学習者の選択方向とレベルの関係性を見ることができる。最後に、一番高い選択率をもつ選択肢にだけ焦点を当てるのではなく、他の選択肢の選択率も考察に含める。より綿密な分析のために、レベル別に対象者をグループ分けした後、質問毎のデータは適合度検定を用いて分析した。適合度検定は、カイ 2 乗検定的一种である。カイ 2 乗検定を使うのは、名義尺度で分類したグループ毎の頻度(回数や人数)データをもとに、カテゴリー間に差異があるかどうかを検証することができる。カイ 2 乗検定では、適用するデータの形によって、適合度検定と独立性の検定がある(竹内・水本 2014)。そのうち適合度検定はカテゴリー変数が 1 つの場合(動詞の種類)に適當であるため、本研究の分析で用いることにした。本調査の結果は以下の表(2)の通りである。

| 自然力による被害 | レベル                               | 自動詞       | 他動詞      | 受身       | 合計 | 検定結果                               |
|----------|-----------------------------------|-----------|----------|----------|----|------------------------------------|
|          | 11.地震で家(a.が壊れた。 b.を壊した。 c.が壊された。) |           |          |          |    |                                    |
|          | N2                                | 26(74.2%) | 1(2.8%)  | 8(22.8%) | 35 | $\chi^2(2)=28.5$ ,<br>p<.001 有意差あり |
|          | N3                                | 21(70%)   | 4(13.3%) | 5(16.6%) | 30 | $\chi^2(2)=18.2$ ,<br>p<.001 有意差あり |
|          | N4                                | 28(68.2%) | 6(14.6%) | 7(17%)   | 41 | $\chi^2(2)=22.5$ ,<br>p<.001 有意差あり |

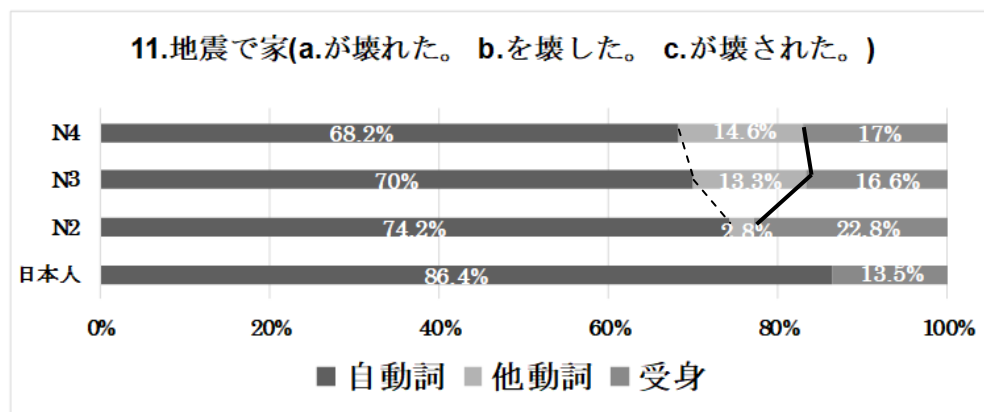
|                                               |           |           |           |    |                                        |
|-----------------------------------------------|-----------|-----------|-----------|----|----------------------------------------|
| 日本人                                           | 51(86.4%) | 0(0%)     | 8(13.5%)  | 59 | $\chi^2(1)=31.3$ ,<br>$p<.001$ 有意差あり   |
| 12.火災で家(a.が焼けた。 b.を焼いた。 c.が焼かれた。)             |           |           |           |    |                                        |
| N2                                            | 22(62.8%) | 3(8.5%)   | 10(28.5%) | 35 | $\chi^2(2)=15.8$ ,<br>$p<.001$ 有意差あり   |
| N3                                            | 13(43.3%) | 5(16.6%)  | 12(40%)   | 30 | $\chi^2(2)=3.8$ , $p=.1$ ,<br>ns.有意差なし |
| N4                                            | 24(58.5%) | 8(19.5%)  | 9(21.9%)  | 41 | $\chi^2(2)=11.7$ ,<br>$p<.01$ 有意差あり    |
| 日本人                                           | 57(96.6%) | 0(0%)     | 2(3.3%)   | 59 | $\chi^2(1)=51.2$ ,<br>$p<.001$ 有意差あり   |
| 13.木が枯れて、倒れたので、近くにある家(が壊れた。 b.を壊した。 c.が壊された。) |           |           |           |    |                                        |
| N2                                            | 11(36.6%) | 10(33.3%) | 9(30%)    | 30 | $\chi^2(2)=2$ , $p=.9$ ,<br>ns.有意差なし   |
| N3                                            | 13(43.3%) | 12(40%)   | 5(16.6%)  | 30 | $\chi^2(2)=3.8$ , $p=.1$ ,<br>ns.有意差なし |
| N4                                            | 23(58.9%) | 10(25.6%) | 6(15.3%)  | 3  | $\chi^2(2)=12.1$ ,<br>$p<.01$ 有意差あり    |
| 日本人                                           | 48(87%)   | 1(1.8%)   | 6(10.9%)  | 55 | $\chi^2(2)=72.6$ ,<br>$p<.001$ 有意差あり   |

表(2): 本調査の結果

#### 4..2.1 条件③自然力による被害の場合の分析

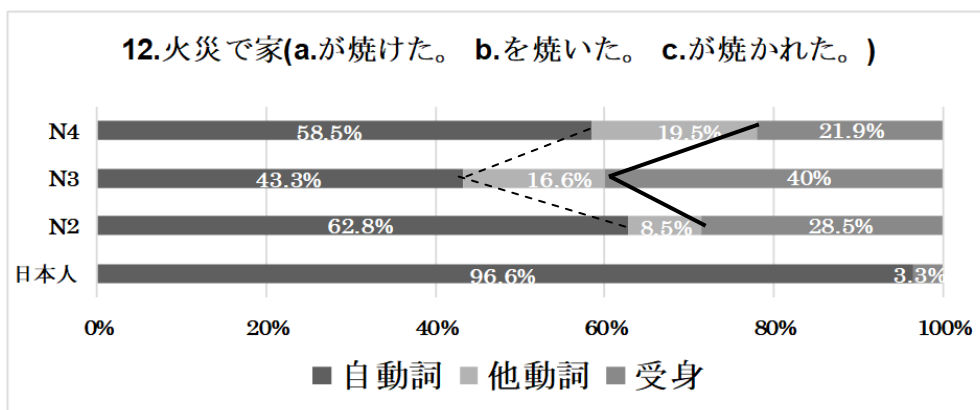
本稿は前述の通りに、図(1)の条件③の「自然力による被害」に絞って条件③の結果を示す。条件③の特徴は自然の勢いから被害を受け、対象の状態が悪化されたという意味を表す。この条件は自動詞選択になると想定した。





図(2): 質問(11)における、レベル別の学習者と日本人の回答傾向

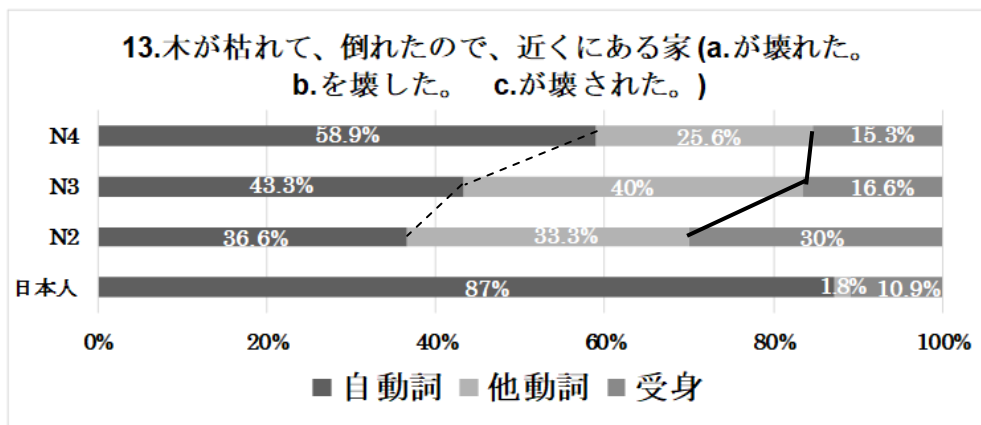
質問(11)は、自然力による被害である地震の影響で、家が壊れたという天災の場面である。図(2)によると、この質問は日本人が 86.4%自動詞、13.5%受身を選択した。学習者のあらゆるレベルは自動詞率が 60%を超えており、日本人に近い。学習者の中でもっとも近いレベルは、N2 の 74.2%である。また、学習者の選択方向とレベルの関係としては、日本人が一番多く選択した自動詞の選択率と比べてみると N4 の 68.2%から N3 の 70%へ上り、また N2 の 74.2%へ日本人に近づいてさらに上っている。



図(3): 質問(12)における、レベル別の学習者と日本人の回答傾向

質問(12)は、火災の影響で家が焼けたという場面を表す。図(3)によると、日本人が 96.6%自動詞を選択したのに対し、N2 が 62.8%、N3 が 43.3%、N4 が 58.5%自動詞を選択した。日本人に一番近いレベルは、N3 と N4 である。この場合の受身率はやや高い。特に N3 の学習者の受身率が 40%でる。学習者の選択方向とレベルの関係に関しては、日本人がもっとも選択した自動詞の選択率

と比べてみると、N4 の 58.5%から N3 の 43.3%へ下がりつつ、N3 の受身率が 40%まで上がっており、自動詞率が N3 の 43.3%からまた N2 の 62.8%へ上がっている。



図(4): 質問(13)における、レベル別の学習者と日本人の回答傾向

質問(13)は、自然に倒れた木の影響で近くにある家も壊れたという現象を表す。図(4)によると、日本人が 87%自動詞を選択した。次に 10.9%受身を選択した。一方学習者の場合、日本人がもっとも選択した自動詞に近いのは、N4 の 58.9%である。また、N3 の他動詞率の 40%であることに目が付く。学習者の選択方向とレベルの関係に関しては、日本人が一番多く選択した自動詞の選択率と比べてみると、N4 の 58.9%から、N3 の 43.3%へ下がり、N3 から N2 の 36.6%へさらに下がっている。

#### 4.4 条件③自然力による被害のまとめ

質問(11)は、アラビア語で表現してみると、自動詞と受身の方が自然になる。この場合の選択方向とレベルの関係は、自然習得に近いと言える。検定結果としては、日本人は自動詞を選択したことが有意である。学習者のあらゆるレベルの場合も、仮説通りで有意に自動詞を選択した。

質問(12)の場合はアラビア語で表現してみると、自動詞のほうが自然だと言える。そのため、N2 と N4 の自動詞の高い率の原因は、習熟度を表しているというより、アラビア語による影響が強いと考えられる。N3 の受身率が 40%の原因は、被害の受身だと思っており、自動詞と被害の受身の混乱によるものと予測できる。検定結果では、日本人は自動詞を選択したことが有意である。学習者の中で N4 と N2 だけは、仮説通りで有意に自動詞を選択した。

質問(13)の検定結果としては、日本人は自動詞を選択したことが有意であるが、学習者の中で、N4だけは、仮説通りで有意に自動詞を選択した。この表現の場合はアラビア語で表現してみると、自動詞の方が自然だと言える。そのため、N4が有意であったのは、本来アラビア語の影響による結果だと考えられる。ただし、N4からN2へ上がるにつれて、他動詞率も高くなることが目立つ。その理由は、一部の学習者が「木」を動作主として考えたので、「壊す」という他動詞が「木」の行為だと見做していると考えられる。アラビア語でも、このように他動詞で表現しうる。また、N4からN2へ、受身率が上ったのは、学習者が、被害の受身だと思っていたと言える。被害の受身はアラビア語にないため、N4の初期のレベルでは、まだ定着しないことが多い。

質問(11)(12)(13)の質問はどれも自然力で起きた被害であるにもかかわらず、学習者の選択方向は明らかに異なっている。質問(11)の自動詞の選択率が圧倒的に高いのに対し、質問(12)と(13)の自動詞の選択率が62%を超えてない。また、どの質問の受身の選択率が著しく15%を超えている。更に、どのレベルの学習者の質問(13)の他動詞の選択率が25%を超えていることが著しい。

このように自然力による被害は概ね仮説通り、自動詞であった。ただし、被害の受身との混乱が起こる可能性がある。特に学習者のレベルが上がるにつれて起こる可能性が高くなると見られる。やや習得しやすいと言える。

## 5. まとめと今後の課題

自然力による被害の条件については、表(2)によると、日本人がもっとも選択したのは、自動詞であり、いずれの結果も有意である。学習者の場合、学習者のあらゆる場合の6つの検定結果が仮説通り、有意であるのに対し、3つの検定結果が有意でない。また、この条件は学習者が被害の受身だと解釈する可能性がある上に、アラビア語での受身の可能性もあるため、自動詞と受身の選択の混同があると予測できる。そのため、習得しにくいと考えられる。

また、アラビア語を母語とする日本語学習者に教える時の注意点としては、以下の通りである。

- (a) 自然力による被害の条件を教える際、学習者が「雨に降られた」や「電車の中で子供に泣かれた」などのような日本語の間接受身と混同しやすくなる可能性があるため、日本語の独特な間接受身と有対他動詞と対応する被害の受身と自動詞の区別を注意する必要がある。
- (b) アラブ人日本語学習者に被害の意味を表す動詞を教える際、アラビア語の受身は日本語の受身ほど使われていない上に、使っても、アラビア語の受

身の構文的な特徴として、文上に動作主が現れにくいことを視野に入れておくべきである。

最後に、上記の「自然力による被害の場合」というカテゴリーの結果を受け、下記の提案を今後の課題を考える際、視野に入れる必要があると考えられる。

- ① 日本語と比べて、アラビア語の受身は、非常に限られているケースに使用し、日常会話にほぼ使われていないため、今後の調査は、自動詞と他動詞に絞る必要があるとみられる。
- ② 今まで提案された分類は、文から感じられる働きかけの程度、視点、人称、動作主の性質、動作主と被動作主の特定と不特定を考慮し、さらに具体的に分類する必要があると考えられる。
- ③ 日本語とアラビア語の両言語母語話者の実際の動詞の使い分けを明らかにするために、②を視野に入れた調査を日本語とアラビア語に訳したうえ、一般の日本人とアラブ人を対象にする必要があるとみられる。
- ④ 両母語話者の動詞の使い分けの客観的な結果に辿り着くために、統計的に問題数を考える必要があると考えられる。
- ⑤ 量的・横断的な研究手法を用いて、取り上げた有対自他動詞の研究は最も多いが、日本語の自他動詞の習得の研究分野に新たな結果と知識を導き出すために、質的・縦断的な研究手法を用いて、研究する価値があると考えられる。

## 【参考文献】

- アッサラー・ムハンナド (Alsarra, Mohannad) (2019) 『アラビア語を母語とする日本語学習者における日本語の自動詞・他動詞・受身の選択について』 名古屋大学修士学位論文
- 天野みどり(1987) 「状態変化主体の他動詞文」『国語学』第 151 集 日本語学会 pp.110-97
- 石川守(1991) 「自動詞と他動詞の用法についてー『人の視点』と『物の視点』に関してー」『語学研究』第 64 卷 拓殖大学語学研究所 pp.35-80
- エルハディディ・アブデルラフマーン(2017) 「アラビア語を母語とする日本語学習者の自動詞・他動詞の選択について」『日本語・日本文化研究』第 27 号 pp.194-203
- 奥津敬一郎(1967) 「自動化・他動化および両極化転形」『国語学』第 70 卷 国語学会 pp.46-66
- 木村将史(2006) 「現代標準アラビア語の『受身』構文について」『関西アラブ・イスラム研究』第五号 pp.43-55
- 黒柳恒男・飯森嘉助(1999) 『現代アラビア語入門』 大学書林
- 小池生夫・寺内正典・木下耕児・成田真澄(2004) 『第二言語習得研究の現在ーこれからの外国語教育への視点』
- 小林典子(1996) 「相対自動詞による結果・状態の表現ー日本語学習者の習得状況」『文藝言語研究・言語篇』第 29 卷 筑波大学文芸・言語学系 pp.41-56
- 小林典子・直井恵理子(1996) 「相対自・他動詞の習得は可能かースペイン語話者の場合ー」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第 11 卷 筑波大学留学生センター pp.83-98
- 迫田久美子(2002) 『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク
- 白井恭弘(2008) 『外国語学習の科学ー第二言語習得論とは何か』岩波新書
- 佐久間淳一・加藤重広・町田健(2004) 『言語学入門』 研究社
- 鈴木孝明(2015) 『日本語文法ファイルー日本語学と言語学からのアプローチー』くろしお出版
- 杉村泰(2013a) 「対照研究から見た日本語教育文法ー自動詞・他動詞・受身の選択ー」『日本語学』第 32 卷 明治書院 pp.40-48
- 杉村泰(2013b) 「中国語話者における日本語の有対動詞の自動詞・他動詞・受身の選択についてー人為的事態の場合ー」『日本語／日本語教育研究』[4] 2013, 日本語／日本語教育研究会・ココ出版, pp.21-2
- 杉村泰(2015a) 「日・中・韓・ウズベク語話者における日本語の有対動詞の自動詞・他動詞・受身の選択」『東アジア日本語・日本文化研究』第 19 号 東アジア日本語・日本文化研究会 pp.1-18
- 杉村泰(2015b) 「クメール語を母語とする日本語学習者における日本語の自動詞・他動詞・受身の選択について：非人為的事態の場合」『言語文化論集』

- 第 37 号 名古屋大学大学院国際言語文化研究科 pp.31-44
- 杉村泰(2015c) 「クメール語を母語とする日本語学習者における日本語の自動詞・他動詞・受身の選択について：動作主の不注意による対象の変化を表す場合」『ことばの科学』第 29 号 名古屋大学言語文化研究会 pp.105-120
- 杉村泰(2016a) 「英語を母語とする日本語学習者における日本語の自動詞・他動詞・受身の選択について—非人為的事態の場合—」『言語文化論集』第 2 号 名古屋大学大学院国際言語文化研究科 pp.3-16
- 杉村泰(2016b) 「英語を母語とする日本語学習者における日本語の自動詞・他動詞・受身の選択について—動作主の不注意による対象の変化を表す場合—」『ことばの科学』第 30 号 名古屋大学言語文化研究会 pp.5-20
- 杉村泰(2016c) 「クメール語を母語とする日本語学習者における日本語の自動詞・他動詞・受身の選択について：人為的事態の場合」『言語文化論集』第 37 号 名古屋大学大学院国際言語文化研究科 pp.49-62
- 杉村泰(2017) 「英語を母語とする日本語学習者における日本語の自動詞・他動詞・受身の選択について—人為的事態の場合—」『言語文化論集』第 2 号 名古屋大学大学院国際言語文化研究科 pp.19-31
- 曾ワントン(2012) 『中国語母語話者における有対他動詞の受身表現と自動詞の使い分けについて』 名古屋大学修士学位論文
- 高見澤孟／伊藤博文／ハント蔭山裕子／池田悠子／西川寿美／恩村由香子 (2004) 『新・はじめての日本語教育基本用語事典』 アスク出版社
- 竹内理／水本篤(2014) 『外国語教育研究ハンドブック—研究手法のより良い理解のために—』 松柏社
- 竹沢幸一(1991) 「受動文、能格文、分離不可能所有構文と「ている」の解釈」『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版 pp.59-81
- 寺村秀夫(1982) 『日本語のシンタクスと意味』第 I 巻 くろしお出版
- 富田美智子(1993) 「有対動詞の自動詞表現と受身表現」『人文論究』第 56 巻 北海道教育大学函館人文学会 pp.161-176
- 中村祐理子(2002) 「中級学習者の受身使用における誤用例の考察」『北海道大学留学生センター紀要』第 6 号 北海道大学留学生センター pp.21-36
- 新妻仁一(2009) 『アラビア語文法ハンドブック』白水社
- 西尾寅弥(1982) 「自動詞と他動詞—対応するものとししないもの—」『日本語教育』第 47 号 pp.57-68
- ハッサン・エバ(2011) 「エジプトアラビア語における動作主脱焦点化について」『一般言語学論叢』第 14 号 筑波一般言語学研究会 pp.65-89
- 町田章(2011) 「日本語受身文の分化と客体化—経験主発生の認知メカニズム—」『日本英文学会北海道支部第 56 大会』札幌学院大学
- 森田良行(1987) 「自動詞と他動詞」『国文法講座 6 時代と文法—現代語』第 6 巻 明治書院 p.155-180
- 守屋三千代(1994) 「日本語の自動詞・他動詞の選択条件—習得状況の分析を

参考にー」『講座日本語教育』第 29 分冊 早稲田大学日本語研究教育センター pp.151-165

Elsherbeny, Maher (1999) 「アラビア語と日本語における受身形の対照研究」『Nidaba』第 28 号 西日本言語研究会 pp. 98-107

【外国語文献】

Van Els, T. (1986) An overview of European research on language attrition, in Weltens, B., de Bot, K. & van Els, T. (eds.) *Language Attrition in Progress*, 241-251, Foris.

William Wright, W.(1896-1898) *A Grammar of the Arabic Language, vol. I and II*, Cambridge University Press.

عضيمة، مُجَدَّ عبد الخالق. المغني في تصريف الأفعال. القاهرة: دار الحديث، (٢٠١٢).